

自由研究発表 1

ヨーロピアン・ディメンション教育の理念と実践
～スコットランドを中心に～

柿内真紀 立正大学（非常勤講師）

1. はじめに

ヨーロッパ統合が進展するなかで、国境という1つの壁が崩されようとしている現在、一国家、一言語、一文化という単一的な捉え方は成立しない。各国で、これまで問題を孕みながらも認められてきた多文化性は、区切られる壁（国境）が開かれるために、どの文化がどの国のだれの文化であるかということも問われなくなる可能性がある。また、その逆の可能性もある。それは、国家という枠組みが弱くなるにつれて、地域の多様性が浮かび上がり、これまでよりも各地域の言語や文化がヨーロッパという枠組みのなかで強調されるということである。自分はいったい何者であるのか、という問いかけは上の2つのどちらにも向かう可能性があるのである。拡大する統合ヨーロッパを舞台に、ヨーロッパは、さらにヨーロッパ中心主義を強めていくのだろうか。それとも、脱ヨーロッパ中心主義へと向かうのだろうか。

そこで、以上の問題関心から、国境が開かれた教育の在り方が、やはりヨーロッパ中心であるのか、そうではないのかを焦点にしながら、現在EUが手がけているヨーロピアン・ディメンション教育(European Dimension in Education)の捉え方を、その理念と実践例（スコットランドの事例が中心）にみてることにする。

2. ヨーロピアン・ディメンション教育の理念

EUのヨーロピアン・ディメンション教育は、1988年のECの文部大臣会議での決議を受けて、各加盟国でヨーロピアン・ディメンション教育に関する文書作成から活動が始められている。そこでまず、スコットランド教育省の政策文書*1から、その理念*2を分析してみると、ヨーロピアン・ディメンション教育は理念的にはヨーロッパ中心主義ではない捉え方がなされていることがわかる。それは、スコットランドの場合、二項対立的な捉え方からさらに踏み込んで、「ヨーロッパおよびより広い国際的な知識」というヨーロッパを含んだインターナショナルなものとしてヨーロピアン・ディメンションを捉えているところに顕れている。

3. ヨーロピアン・ディメンション教育の実践例

ここで事例*3として取り上げるのは、CBEVE*4が主催する、The European Curriculum Awards*5の1996年度の受賞校である。シェットランド諸島にある、26名の児童（5-12歳）、2名のフルタイムのスタッフと7名のパートタイムのスタッフから成る、Lunnasting Primary Schoolというかなりの小規模校である。

当校のスタッフは、生徒にヨーロッパについての知識が欠けているという感じ、それを4カ月のイニシャル・プロジェクトで改善しようとした。そのプロジェクトのための横断的カリキュラー（cross-curricular）の全体像は、異なる加盟国やEUの法制について学習することを環境学習（Environmental Studies work）に合わせ、数学については異なるヨーロッパの通貨について教え、他の国で買い物をすることに基礎を置いた問題解決活動を考案し、宗教・道徳教育（religious and moral education）はヨーロッパの異なるクリスマスの習慣を調査することを通して生まれ、さらにそれをドラマに用いたり、クリスマス・ショーを工夫する（この部分はカリキュラム領域の Expressive Arts にあたる）ものである。すべてのプロジェクトの中心は、他国（フィンランド、スウェーデン、デンマーク、オランダ）からやってきた人々と接触する機会を可能な限りの活用であり、すでに提携しているベルギーの学校との連携をさらに広く発展させていた。

この実践は、SCCC（Scottish Consultative Council on the Curriculum）のパンフレット（1993）*6に示された、ヨーロピアン・ディメンションは教科もしくはカリキュラム領域（初等学校のカリキュラムは5領域*7）の特定の部分に限らないという内容に照らしても、それに沿ったものである。子どもたちは身近なところからの他者との接触を最大限に利用し、それを軸にカリキュラムの5領域にわたってバランスのとれた実践がされている。それは、自己のアイデンティティを確立する空間を狭く身近なものから、拡大された空間へと広げる出発点にもなっているのではないだろうか。

4. おわりに

実践例をみるとまだヨーロッパの枠に限られているが、上述のように、自己のアイデンティティを確立する空間を狭く身近なものから、拡大された空間へと広げる出発点になっているという意味においては、ヨーロッパ中心主義からの解放の可能性はあるだろう。また、理念的にもヨーロピアン・ディメンション教育は、ヨーロッパ中心主義をとるものではないことがわかった。しかし、冒頭で述べたように、国家の枠組みが弱くなるにつれて、地域の多様性が浮上し、たとえば「スコットランドであること」を強調することで1つの次元に偏重したヨーロピアン・ディメンションにならないように多元的なバランスをとれるかどうかと同時に問われている*8のである。

注

- *1 DES(1991), *The European Dimension in Education, A Statement of the UK Government's Policy and Report of Activities Undertaken to Implement the EC Resolution of 24 May 1988 on the European Dimension in Education* SOED(1994), *Scottish Education and The European Community ~Policy, Strategy and Practice~*
- *2 本稿で触れられなかった詳細については、関連した共同研究の成果である次の拙稿を参照のこと。柿内真紀・園山大祐（共著）「EUの教育におけるヨーロッパ・ディメンションの形成過程とその解釈について～スコットランドの事例を中心に～」、『比較教育学研究』第24号、日本比較教育学会、1998年
- *3 CBEVE, NEWS, No.5 Spring 1997, pp.12-13. 紹介する実践例は、掲載された受賞校の校長による紹介記事を用いたものである。
- *4 CBEVE(Central Bureau for Educational Visits & Exchanges)は、1948年に設立され、1993年にブリティッシュ・カウンシルの傘下に入った組織である。組織の主たる目的は、教育的な訪問や交換事業のすべての形態にわたる促進となっている。
- *5 The European Curriculum Awardsは、ヨーロッパ・ディメンションを促進する優れたカリキュラム開発に対して、応募により毎年6校程度が選ばれ、1,000ポンドが授与されるものである。
- *6 SCCC(1993), *European Dimension Across the curriculum*
- *7 ナショナル・ガイドライン（5～14歳）のうち、初等学校のカリキュラムは5つの領域（Language, Mathematics, Environmental Studies, Expressive Arts, Religious and Moral Education）で捉えられている。
- *8 この結論は、先の注2に示した共同研究から導かれたものである。